

東北の伝統こけし

東北地方に住む私達にとって、こけしは大変身近で慣れ親しんだ人形といえるでしょう。私達の身の回りにはたくさんこけしが存在します。これは、こけし製作が東北地方に集中しているという特異な現象からきています。

なぜこけし製作が東北地方に限られているのか、よくわかっていません。こけしが文献上最初にあらわれるのは文久2年(1862)で、『御郡村御取御箇条御趣意帳』(現宮城県鳴子町鬼首・高橋家文書)に「木地人形こふけし」と出ています。こけしの発生にはいろいろな伝承もありますが、だいたい江戸時代末期とみてよいでしょう。現存するもので製作年代が最古のものは明治29年(山形県蔵王温泉仙台屋所蔵)とされています。

こけしの由来もさまざまで、信仰用・おしゃぶり玩具用・人形用、など諸説があります。本展では館所蔵約650点の中から、柴田はじめコレクションを中心に233点を系統別、工人別に展示しました。



期間中の催し物

講演会 「組み上げ絵の世界」
期 日 11月3日(木) 文化の日 13:30～
場 所 山形県立博物館 講堂
講 師 アン・ヘリング氏
 (法政大学教授・児童出版文化史)

展示資料目録

| 資 料 名 | 点数 | 所 蔵 者 名 |
|-----------------------------------|-----|-----------------------------------|
| 相 良 人 形 | 200 | 本 館 |
| 相 良 人 形 木 型 | 1 | 地 主 憲一郎氏 |
| 相 良 人 形 抜 型 | 2 | 相 良 隆氏 |
| 相 良 人 形 製 作 工 程 品 | 5 | 相 良 隆氏 |
| <組み上げ絵>(組立模型20・刷絵23) | | |
| 1. しん板ひなだん組立の図 (安政6年) | 1 | { アン・ヘリング氏(刷絵) たばこと塩の博物館(組立模型) |
| 2. 志ん板おやしきこしらひ形 (慶応3年) | 1 | " |
| 3. 新板おざしきこしらひ姉様遊 (明治) | 1 | " |
| 4. 蒸気船組み上げ (明治25年) | 1 | " |
| 5. 児童体操の図 (明治初期) | 1 | " |
| 6. 新版汽関車組立 (明治35年) | 1 | " |
| 7. 教育ポート組立 (明治36年) | 1 | " |
| 8. きんぎょばち組上 (明治29年) | 1 | " |
| 9. 新版美魚籠くみたて (明治31年) | 1 | " |
| 10. 幼稚園玩弄鳥こしらえ上 (明治) | 1 | " |
| 11. 教育かちかち山組上 (明治36年) | 1 | " |
| 12. 常盤津けいこ本づくし (明治30年) | 1 | " |
| 13. 雛段組立絵 (明治29年) | 1 | " |
| 14. 雛 祭 (明治40年) | 1 | " |
| 15. 大志んはんすいくわや (明治) | 1 | " |
| 16. 極大しんばんあまざけ切組み (明治) | 1 | " |
| 17. 極大しんばん切組大さか中の嶋・浪花橋 (明治) | 1 | " |
| 18. 大しんばん組上金魚からくり (明治) | 1 | " |
| 19. 大新版芝居大仕かけ (明治) | 1 | " |
| 20. 大新版宝船組上 (明治) | 1 | " |
| 21. 版木(歌舞伎座當り)狂言羽衣・明治31年) | 5 | 株式会社 吉 徳 |
| 22. 刷絵(") | 3 | " |
| <組み上げ絵参考品> | | |
| 1. こけしめくり(双六) | 1 | アン・ヘリング氏 |
| 2. 新版十六むさし | 1 | " |
| 3. おもちゃ尽くし | 4 | " |
| 4. 新板手遊尽くし | 1 | " |
| 5. こけし模様千代紙 | 4 | " |
| 6. 人形細工用錦絵 | 5 | " |
| 伝 統 こ け し | 233 | 本 館 |
| こ け し 製 作 工 程 品 | 8 | 小 林 清次郎氏(寄贈) |

今回の展示でご協力・ご指導いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

東京都=アン・ヘリング氏(法政大学教授)、東京都=たばこと塩の博物館・岩崎均史氏、東京都=株式会社吉徳・資料室長小林すみ江氏、山形市=学校法人南風学園あおぞら幼稚園、山形市=小林清次郎氏、山形市=吉田慶二氏、米沢市=相良 隆氏・梅津宮雄氏・地主憲一郎氏

企画展

子どもと玩具

～人形と組み上げ絵と～



期 日 1988年9月24日(土)～11月27日(日)

組み上げ「雛段」(明治25年)

開催にあたって

「一生童心」—これは人形研究者山田徳兵衛氏の座右の銘です。人形を通して子供のような純真な心を一生持ち続けたい、ということだと思います。童心に帰ることが、ふるさとに帰ることと同じような意味を持つことを、忙しい日常の中でつい忘れがちになっていないでしょうか。

今回の展示は、大変めずらしい組み上げ絵を中心に企画しました。心のふるさとに立ち帰っていただければ幸いです。

なお、特に組み上げ絵については、「あおぞら幼稚園」の多大なご協力を得ました。

山形県立博物館

玩具について

玩具は、子供のもてあそぶ「おもちゃ」というのが原義です。未発達の子供・児童が一過性で遊び戯れる用具ということになるでしょう。したがって、それらは人間の成長に伴って次第に遠ざかっていくというイメージでとらえられます。確かにそういう側面はありますが、果してそれだけでしょうか。子供が専有するたわいのないものとだけ考えるわけにはいかない特有の“文化”を持っているように思われるのです。

玩具にはたくさんの種類がありますが、特に郷土玩具は民間信仰に結びついたもの、各地の伝統的な習俗や生活行事に結びついたもの、世相を反映したもの、など、さまざまな結びつきの中でつくられてきたものといえます。

玩具は子供のみならず大人も含めた庶民全体の、いわば生活文化財としてみることはできないでしょうか。木や土のぬくもりの伝わる玩具を通して、その時代、時代の私達の“生活”や“心”を見つめ直したいのです。

郷土が誇る相良人形

相良人形は仙台の埴人形、岩手の花巻人形と並んで東北三大土人形に数えられています。その歴史は江戸時代までさかのぼることができます。最初の製作者は米沢藩士・相良清左衛門厚忠(1760～1835)という人です。彼は10代藩主の上杉治憲(鷹山)に、殖産興業政策の1つとして陶器製作を命じられ、



はじめは陶器づくりに専念しました。後世「成島焼」として名を知られる陶器です。

そして後には自分の趣味として土人形づくりを始めましたが、これが相良人形のはじまりです。厚忠以後子孫が代々人形づくりを継承して、現在まで七代を数えます。相良家には人形初代厚忠の名で書き記された、一子相伝の人形製作本である『人形拵 秘事控言』(寛政9年)が伝えられ、製作技術や工程が代々正確に伝承されてきたことがうかがえます。現在七代目相良隆氏が製作にあたっていますが、人形の種類は100種類以上あります。昭和57年に犬の人形が年賀郵便切手に用いられたことも、相良人形の名を全国に広めることになりました。このたびは本館所蔵約300点の中から梅津宮雄コレクションを中心に200点を展示しました。小型で可憐な童子人形が多く、思わず手にしたくなってしまいます。

組み上げ絵の世界

「組み上げ絵」とは、あまり耳慣れない言葉だと思います。それもそのはず、東北に住む私達のほとんどの人は見たことも触れたこともない絵なのです。それは江戸時代中期以降から大正時代まで江戸・京都・大阪を中心に流行したあそび絵・おもちゃ絵の一種です。名称はさまざまあって、「組み上げ燈籠」「切り組み燈籠」、大阪では「立版古」と言ったようです。

組み上げ絵は、木版で和紙に多色刷りされた錦絵(浮世絵版画)と同じものですが、最終的にはそれを鋏で切り抜き、糊で貼ったり、厚紙や竹ひごで補強して組み立て、立体化していく楽しみがあるところに特徴があります。種類は「芝居もの」「風物もの」「風景もの」「古典・逸話もの」など数百種に上るといわれています。明治時代には画題に変化が見られ、西洋文明の流入による新しい風俗や日清・日露戦争の絵柄も



版木「羽衣」(16組の1)



刷絵「羽衣」(3組の1・明治31年)

に際し合理的、系統的に考える能力を持った人ができたのではないかと考えています。ヘリング教授は絵師達の技術の高さも指摘し、「産業革命以前に、江戸時代の日本で自力で切り開かれた組み上げ燈籠は、すでに『近代』そのものを先取りしていた」と考え、遊びの高いレベルに言及しています。

今回の展示は、たばこと塩の博物館の岩崎均史氏のご指導で製作された中から小品20点と、吉徳資料室から版木と刷り絵、さらにヘリング教授からは刷り絵と江戸の出版文化を考える参考品も借用し、ご協力を頂きました。



組立模型「秋の宮島」(文化・文政頃)

出てきます。

組み上げ絵は、特に夏の遊びとして製作され、夕涼時に組立品の後方から蠟燭を灯すと一層美しく見えるものだったようです。組み上げ燈籠とも言われたゆえんです。また、組み上げ絵の季語が夏であるのもうなずけます。

組み立ては子供から大人まで楽しめるものだったようですが、児童出版文化史研究家のアン・ヘリング法政大教授は、経済的・時間的余裕のある人で、組み立て